<怒、がない！>藤本義一さん亡くなって13年

山口　洋司

深夜のテレビ「11PM」で広く知られ、行動する作家として大阪、関西圏の文化を牽引してきた藤本義一さんが亡くなって昨年が13回忌でした。

藤本義一さんは学生の頃から東の井上ひさし氏とは多くの文学賞を競った間柄で好敵手でした。宝塚映画の脚本部を経て初期のテレビドラマの脚本を書きまくり、途中乞われて「11PM」の司会をやりながら小説に挑み『鬼の詩』で直木賞作家になります。

東京で所ジョージやタモリが話題になりかけると率先して仕事の合間を縫って見にいったかと思うと北海道の精神病院で患者と一緒に過ごし、自分の方の異常に気ずかされたり、思いつくとその渦中に飛びこんで考える。まさに行動する作家でした。テレビでは鋭い直感力と批評精神、卓抜した表現力で抜群の存在感でした。

「上方お笑い大賞」の審査委員を長年やってもらったのですが、会議などすると、皮ジャンパーで両切りのピースの缶を片手に誰よりも先にひょいと会議室に入り、片隅で原稿に専念、会が始まるとここへ来るまでに出くわしたねずみとりの話からヨーロッパと比較して、いかに陰湿なやり方か文明論になっていったり、東京からの帰りだと電車の中吊り広告の東西の比較になり、座談の名手でもありました。

賞の選考で意見が対立して動かない時があります、そんな時藤本さんは、もしこんなテーマと条件を与えたらどう反応するか、とすんなり議論は動き決まっていくのでした。

晩年はことに大阪の演芸に力を注いた藤本さんです。若手の漫才演者と作者を育てる「笑の会」を秋田実さん亡き後引き継ぎ、知名度や実力がまだないザ・ぼんちやB＆B、阪神・巨人らを激励しながら育て 55 年の漫才ブームにつなげたことでも知られます。

一方、興行会社にはビシネスで演者を潰すな、など辛口を繰り返し、文化を軽んじる当時の橋下徹知事の行政にも厳しく異議をとなえ、街頭署名に立ったりもしました。

藤本さんの創作姿勢はけったいな生き方をする人に興味をもち、常に弱者の側に立つものでした。保革激しく対立した大阪の知事選挙の折、革新の黒田了一さんの応援をする藤本さんに右翼の幹部から「おまえはアカか!」と、電話で怒鳴り込まれ、「おれはクロだ」と応じ、その後居酒屋でその右翼にたんまり取材をするなどエネルギッシュです。

「おおさか憲法9条の会」の呼びかけ人のひとりでもあります。「生きていることに窮状を感じるが、本当の生き方は憲法にある」、と井上ひさしさんとの対談で語っています。

亡くなって13年、昨年の晩秋、藤本さんの志をつなげて欲しい思いで、藤本さんが創設し書き手の養成を目的とした心斎橋大学を借りて「藤本義一を語る夕べ」をかっての同僚と開催しました。藤本さんを知る多くの人が集まり偲び、「次の藤本さん出てよ」、の願いを新たにしたのでした。

「今の笑いには怒がない!、社会にも喜怒哀楽の怒がない!、もっと怒りを！」と藤本さんが常々言っていたのが強烈な印象で残っています。